

直接知覚の認識論と生態学的環境の存在論

佐藤 英明

- 〈目次〉
1. 序論
 2. 基礎づけの不可能性
 3. 表象主義と還元主義
 4. ギブソンの知覚理論
 5. 生態学的環境の存在論

1. 序 論

人間の知識に関する哲学的考察である認識論は、認識の方法、根拠、限界などを主題とする。近代の多くの認識論的哲学は、基礎づけ主義 (foundationalism)、還元主義 (reductionism)、表象主義 (representationalism) に立脚するものとして特徴づけられる。

基礎づけ主義とは、知識の絶対的・究極的な正当化の実現をめざし、不可謬で絶対確実な知識を根拠として、あらゆる認識の正当化を試みようとする立場である。デカルトは、そのような確実で揺るぎない知識の拠り所を、アルキメデスが地球全体を梃子で移動させるために求めた確固不動の一点に喩えた (Descartes, 1641)。デカルト以来、哲学的認識論は「アルキメデスの点」を探究し続けてきた。

こうした基礎づけ主義の試みは、存在論における「還元主義」と結びつく。還元主義とは、多様な存在者をすべて一つの水準に還元し一元化しようとする立場である。知識の正当化という観点から知覚を考察すると、知覚が錯誤を生じる可能性を孕むことは明らかである。それゆえ知覚されているものがそのまま真の実在であるとは考えにくく、真の実在は、知覚 (ドクサ) を越えた理論 (エピステーメー) によって把握される物理的実体であるとされる。こうした還元主義は、古代ギリシアの自然哲学にまで遡ることができる。他方、こうした見方を逆転し、物理的世界を知覚世界からの理論的構成物と見なすことで、還元主義は現象主義へと転換される。物理的世界は真の実在とは見なされず、それは、一連の経験や現象へと還元されるのである。物理的世界への還元は実在論的傾向をもち、現象世界への還元は観念論的傾向をもつが、両者はともに存在の一元化をめざしている。

知覚における錯誤の問題は、表象主義の強力な根拠ともなっている。現実には存在しないものが知覚的に現象するという事態は、外界とは区別される表象的存在を想定することで整合的に説明できる。知覚を表象の構成とし、

認識を記号的表象の処理と見なす表象主義的立場は、近代哲学の認識論の多くに共有され、現代の認知科学における認知主義にも継承されている。

アフォードンスという独創的概念の提唱者として知られる J. J. ギブソンの生態学的知覚論は、以上のような近代認識論の基本的立場を覆すものである。ギブソンの「直接知覚 (direct perception)」の理論は、一切の表象主義的仮説を否定し、知覚される「生態学的環境」に関する記述は、還元主義を排除する。このように従来の哲学的認識論の対局に位置づけられるギブソンの知覚論は、近年、認知科学内部での認知主義からの転換、生物学的基盤や身体性の重視といった動向の中で再評価され、その生態学的立場から導き出される哲学的含意に対しても多くの関心が注がれている。

しかし、ギブソンの知覚論は、経験科学としての心理学の成果である。基礎づけ主義の立場からすれば、経験科学の成果によって哲学的認識論が否定されることはありえない。経験科学の知識に正当化の根拠を与えることができるのは、経験の解明をおこなう哲学的認識論だからである。哲学的認識論が経験科学の成果を前提とすれば、循環に陥ることになるから、認識論は心理学のような科学の成果を取り入れたり、考慮したりしてはならないことになる。基礎づけ主義は、経験科学の認識論への参入を拒むのである。

本稿では、まず認識論における基礎づけ主義が放棄されざるをえないことを、クワインとメルロ＝ポンティの哲学に依拠して概観する。そのうえで、ギブソンの生態学的知覚論によって表象主義が否定される理由を示し、生態学的環境の理論が還元主義に代わる新たな存在論へと結びつくことを明らかにしたい。

2. 基礎づけの不可能性

知識の絶対的・究極的な正当化の根拠は、古くから哲学的に重要なテーマとされてきた。「基礎づけ主義 (foundationalism)」の典型とされるデカルトは、方法的懐疑によって「我思う、ゆえに我あり」という絶対的に確実な

根本命題を発見し、これによって他の知識の演繹的正当化を試みた。また、人間の理性による認識が客観性、普遍性をもちうる可能性およびそのための条件を超越論的視点から明らかにしようとしたカントの試みも、基礎づけ主義と見なすことができる。

20世紀を代表する哲学である現象学と分析哲学もまた、その成立当初は、基礎づけ主義を拠り所としていた。フッサール現象学の基本的方法とされる「超越論的還元」は、「基礎づけの徹底主義」を背景として「絶対的な無前提性への還元」をめざすものであった。それは、「通常の意味で『自明』とされる一切の前提の前提」となる「絶対的地盤」の洞察を目的としていたのである。哲学は哲学である以上、その意味のうちに「基礎づけの徹底主義」を欠いてはならないというのが、フッサールの基本的な立場である。フッサール現象学は、「絶対的地盤」からのみ「一切の哲学的諸学科が、そしてそれだけでなく一切の学問全般の基底が発現する」という「基礎づけの徹底主義」に貫かれている (Husserl, 1952, S. 159-162)。

20世紀初頭の分析哲学も、基礎づけ主義的な立場から、形式論理学に基づく認識論の構築をめざした。ラッセルは、論理学と集合論への還元によって数学の基礎づけをおこなったが、さらにこれをモデルとして、認識論における基礎づけの可能性を求めた。推論などを介さず「見知り (acquaintance)」によって直接的に知られるもの (感覚与件) からの論理的構成によって、自然に関する経験的知識を正当化しようというのが、その試みであった。初期の論理実証主義者たちは、この基礎づけプログラムを継承し、その実現をめざした。感覚与件と分析的知識によって、すべての知識を基礎づけようとしたのである。

しかし、クワインは、論理実証主義者が試みた感覚経験への還元には根拠がないことを明らかにし、それが「経験主義のドグマ」にすぎないと断じた (Quine, 1951)。さらに「自然化された認識論」と題された論文では、知識の基礎づけという認識論の第一哲学としての身分も廃棄されざるをえないとした (Quine, 1969)。クワインによれば、自然に関する知識を感覚経験に還元

しようとする試みには、「学說的側面」と「概念的側面」とがある。学說的側面とは、自然に関する知識を感覚的な用語に還元することで正当化することを指している。他方、概念的側面は、自然科学の理論上の概念を感覚的な用語に翻訳し説明することである。かりに自然に関する文を観察用語（感覚与件）と論理学と集合論を用いて翻訳できたとしても、観察可能な特徴を一般化して実際に観察された事例を少しでも越えることになれば、自然科学を感覚経験の上に基礎づけようというもくろみは失敗に終わらざるをえない。したがって、学說的側面に関しては、還元は不可能であり「確実性に対するデカルト的な要求」は「実現する見込みがない」ことが明らかにされる。さらに概念的側面についても、クワインは理論文の観察文への翻訳的還元が不可能であることを示している。

還元が不可能であるということは、古典的な認識論の破綻を意味する。論理実証主義者による基礎づけが失敗に終わったことで、哲学的認識論は消し去られてしまったことになる。しかし、クワインは認識論が不可能になるわけでも、なくなるわけでもないという。古い認識論は、自然科学を感覚与件から構成することで自然科学を包摂しようとした。だが、心理学の一章として自然科学のうちに包摂される新しい認識論が可能であるとされる。この包摂関係は一方的なものではなく、認識論の方も自然科学を包摂するような相互的な関係である。認識論の研究者は、主題となる人間の認識を研究するが、研究者自身もまた主題とされた人間と同じ立場にある。認識論的研究そのものも、それを包摂する自然科学も、認識論の主題である人間の企図によるものである。その意味で、認識論と自然科学の包摂関係は相互的である。

「自然化された認識論」では、自然科学の成果は自由に利用することができることになる。認識論が科学に先立って科学を基礎づけようとするものではない以上、そこに循環はない。クワインは、科学としての心理学の成果を自由に利用できる「自然化された認識論」によって、認識論と心理学との連携をはかったのである。

メルロ＝ポンティの現象学は、ゴールドシュタインの脳病理学やコフカや

ケーラーのゲシュタルト心理学など経験科学の成果を積極的に哲学に取り入れようとしている点で、現象学における認識論の自然化と見なすことができる。メルロ＝ポンティが基礎づけ主義から脱却しえたのは、現象学に対してフッサールとは異なったスタンスをとっているためである（Merleau-Ponty, 1945, Avant-Propos）。超越論的還元によって純粹意識の領域へと立ち還り、現象学を超越論的観念論として展開したフッサールに対し、メルロ＝ポンティは観念論としての現象学を完全に方向転換した。現象学的還元は純粹意識への道を拓くものではなく、世界の無動機的湧出としての現象性そのものを見るためのものとして位置づけられる。フッサールは、事実と本質という存在論的枠組みを前提として純粹意識の本質探究をめざしたが、メルロ＝ポンティは本質学としての現象学を反転させた。形相的還元の目的は本質把握ではなく、現に存在している事象の事実性の認識にあるとされ、本質は事実性を認識するための媒介でしかないことが示される。世界を構成する超越論的主観性ではなく、他の主観と共に世界内に存在する身体的主観が、探究の対象となる。現象学的還元によって経験科学を遮断し独自の哲学の領域を確保しようとしたフッサールに対し、メルロ＝ポンティはそのような還元が不可能であることを前提として、現象学の方向転換をはかった。この転換によって、心理学をはじめとする経験科学の成果をも取り入れた現象学的分析がおこなわれたのである。

メルロ＝ポンティが現象学的還元の意味を転換させたのは、フッサールの後期思想の中核をなす「生活世界（Lebenswelt）」概念の重要性に着目したためであった。生活世界とは、自然科学的な世界理解に先立って、すでに自明なものとして与えられている世界のことである。自然科学の対象とされる物理的自然は、生活世界に対して「理念化」という方法的操作を加えることによって構成された世界であり、方法的抽象の産物である。しかし、近代科学の世界観としての物理学的客観主義は、数学的に客観化可能な世界という「理念化」の帰結にしかすぎない物理的自然のみを唯一の自然と見なし、本来の自然である生活世界を隠蔽し忘却してしまったとされる（Husserl,

1936).

だが、物理的自然に先立つ所与としての生活世界を探究するということは、知識の基礎づけという観点からすると重大な問題を孕んでいる。生活世界が、科学的知識の根源的な地盤であるとすれば、その解明は「エピステーメ」の基礎となる「ドクサ」についての探究ということになる。生活世界は、あらゆる経験の「地盤」でありながら、経験の分析にとって「手引き」となるものでもある。基礎づけるものでありながら基礎づけられるものでもあるというこの逆説的な二重性は、現象学の「基礎づけ主義」が循環に陥らざるをえないことを示している。こうした基礎づけ主義の破綻を、メルロ＝ポンティは「還元の最も偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということである」と表現している (Merleau-Ponty, 1945, p. VIII)。基礎づけ主義を固持したフッサールは、現象学から経験科学を明確に分離しなけりなかつた。事実学である心理学に対して現象学を本質学とするための形相的還元や、基礎づけの徹底主義のための超越論的還元は、そのために不可欠な方法であった。しかし、基礎づけの断念は、経験科学の成果を取り入れることを可能にする。メルロ＝ポンティの手によって、現象学は、基礎づけという足枷から解放されたのである。

3. 表象主義と還元主義

方法的懐疑において、デカルトは感覚知を疑い得るものと見なした。感覚は時に錯覚に陥り、われわれを欺くことがあるからである。通常、感覚によって知覚されるのは实在物であり、われわれは何ものにも媒介されずに实在物そのものを直接、知覚していると考えられている。ところが、錯覚においては、实在しない物や現実とは対応しない物が現れる。錯覚においても、何が知覚されてはいるのである。外部世界に实在する事物ではないとすれば、それは、主観的に構成された表象である。この場合、錯覚は、实在世界に対応しない内的表象の構築と見なすことができる。表象の存在を想定する

ことで、知覚における錯誤は整合的に説明される。錯覚が、実在世界に対応しない表象の知覚であるとするれば、通常の知覚は、実在に対応した表象の知覚であると考えられる。それゆえ、われわれは、表象を媒介として間接的に実在世界を知覚していることになる。このように、知覚される対象を実在と表象に二重化し、知覚を何らかの表象の構成と見なす立場は「表象主義 (representationalism)」と呼ばれるが、表象主義は、存在論における「還元主義 (reductionism)」と結びつく。

「我あり」という第一原理から出発して、デカルトは外部世界や物体の存在を正当化するが、存在が認められるのは、人間が知覚しているような世界ではない。存在することが保証されるのは、精神が明晰判明に認識しうるもののみである。感覚による色、音、味などの把握は曖昧であり、それらが真の存在を捉えているとはいえない。明晰判明に認識しうるのは、純粋数学の対象としての物体のみである。したがって、味や匂いなどは、外部世界の存在からは排除され、世界は、数理的構造をもつ延長的物体から構成される自然へと還元される。このように多様な存在者を一つの水準に還元し、一元的に説明しようとする立場は「還元主義」と呼ばれる。

例えば、原子論的世界像では、あらゆる事象は原子の集合と離散に還元される。本当に実在しているのは原子だけであるとされ、われわれが日常的に実在として経験する事物は、主観的構成物と見なされ、真の実在からは排除される。還元主義は、存在者の存在様態を単純化する方向へと進むのである。

こうした物理学的還元主義に対し、逆に物理的世界を主観的構築物と見なし、現象へと還元しようとする考え方もある。現象主義的な経験論あるいは観念論の立場からすれば、真の実在は感覚や知覚といった経験あるいは現象のみであり、知覚された現象を越える諸対象は理論的な構成物と見なされる。存在は知覚へと還元されるのである。

論理実証主義における基礎づけプログラムでは、還元は主に言語の問題として扱われた。自然科学において用いられる理論文を感覚与件の表現である

観察文へと還元しようという試みがなされたのである。そして、このような還元主義を最も徹底したのが、カルナップの『世界の論理的構築』であった (Carnap, 1928)。

物理学的還元主義においても現象主義的還元主義においても、共通の前提とされているのが、表象主義である。

現象主義的な経験論やカントの観念論、フッサール現象学など、近代哲学の知覚理論の多くは、表象主義的な立場をとってきた。この立場は、心理学や認知科学における「認知主義」にも共有されている。認知主義では、感覚器官から入力されたデータが、脳において過去の記憶と照合されつつ処理されることで、何らかの知覚表象がもたらされると考えられている。そして認知過程は、この表象に対する一種の記号処理であるとされる。このように、心的過程を計算的記号操作と見なす「計算主義」と「表象主義」とが結びついて、認知主義は成立した。

表象主義では、「世界」とは、各々の主観にとっての表象、すなわち主観的現出であるとされる。だが、そのような「世界」は、各人の世界でしかなく、主観の数だけ世界が存在することになり、それらの世界の中の調和、あるいはすべての主観にとって存在する客観的世界を説明することが困難になる。

この問題に対しては、二通りの対応が考えられる。一つは物理的存在のみを唯一の客観的実在と見なす物理学的客観主義の立場である。世界は、われわれが知覚しているような有様で存在しているのではなく、物理学によって記述されるようなものとしてのみ実在していると考えるのである。この考え方は、先述の物理学的還元主義と結びつくことになる。

もう一つの立場は、これとはまったく逆に、物理的世界も主観的に構成されたものにすぎないと考える。現象主義的な経験論や観念論のような見解においては、物理学の対象とされているような世界は、経験世界から理論的に構築された仮構物にすぎないとされる。

例えば、先述のように、フッサールは自然科学的な世界理解に先立って、

すでに「生活世界」が人間には与えられているという。自然科学の対象とされる物理的自然は、生活世界に対して方法的操作を加えることによって「理念化」された世界であり、方法的抽象の産物にすぎない。しかし、物理学的客観主義は、理念化の帰結でしかない物理的自然を本来の「自然」と取り違えてしまっているという。

だが、その場合、客観的世界の存在という問題は、どのようにして解決されるのか。フッサールによれば、他者は、主観にとっては「物体 (Körper)」として知覚されるが、その固有の振る舞いによって、自分の身体との「類比的統握 (analogisierende Auffassung)」を通して、「身体 (Leib)」という意味が移し入れられる。さらに「自己移入 (Einfühlung)」を介して他の主観が構成されると、世界は、あらゆる主観に対して現存する世界、すなわち「間主観的世界」として経験されることになる。こうして、すべての人間に共有される客観的世界が構成されるという (Husserl, 1952)。

しかし、人間にとっての客観的世界がかりにこのようなかたちで説明可能だとしても、多様な生物種の間で共有されている世界は、依然として説明されないままに残されてしまう。ユクスキュルは、動物が知覚しうるものの総体としての「知覚世界 (Merkwelt)」と、その動物が働きかけることのできるものの総体である「作用世界 (Wirkwelt)」との統一体を、その動物の「環境世界 (Umwelt)」と呼んだ (Uexkül, 1934)。知覚世界や作用世界は、感覚器官や運動器官の構造によって異なるものとなるから、環境世界は動物の種によって異なることになる。フッサールの「間主観的世界」は、人類にとっての環境世界でしかない。他の生物種とも共有される世界については、なお問題は残されたままである。

E. S. リードは、物理的客観主義も現象主義的構成主義も、表象主義を前提とするかぎり問題を解決しえないと主張している。「2000年以上にもわたって、西洋の認識論は、心はすでに存在する世界をコピーしているとする主張と、心は世界をまるごと構成しているとする主張のあいだを揺れ動いてきた。そのすべての議論が同じ論理上の欠陥を抱えている」。それに対し、生

生態学的心理学は「この論争全体が誤謬であるとする前提から出発する」のだという (Reed, 1996, p. 13).

ギブソン自身が明らかにしているように、「アフォーダンス」という考え方はゲシュタルト心理学者レヴィンの「要求特性 (Aufforderungscharakter)」概念にその起源をもつ (Gibson, 1979, p. 138). 要求特性とは、知覚者に対して環境世界が示す意味や価値のことである。ゲシュタルト心理学では、要求特性は、実在的物理的な「地理的環境」ではなく、「行動的環境」すなわち知覚者の主観に依存する現象的対象に属するものとして位置づけられた。それに対して、ギブソンは、アフォーダンスが知覚者の要求からは独立して環境内に実在するものであると主張している。物理的客観主義と現象主義的構成主義との「論争全体」を「誤謬であるとする前提」とは、こうした実在論的な立場である。

4. ギブソンの知覚理論

「生活世界」「環境世界」「要求特性」といった概念は、いずれも、物理学的に記述されるような世界を知覚の対象とはせず、知覚者と知覚者を取りまく環境との関係に着目している。その意味で、これらの概念にはギブソンの「生態学的環境」との共通点を見いだすことができる。しかし、あくまでも表象主義的見方をとっているために、生態学的環境とは違って、それらは現象的存在と見なされている。

ギブソンは、旧来の知覚理論を否定し、「直接知覚 (direct perception)」の理論を提示した。これは、知覚に関するあらゆる表象主義的見解を拒絶するものである。ギブソンによれば、「直接知覚」という表現は、知覚が一切の画像的表象に媒介されることのない過程であるということを示している。

直接知覚とは、例としてナイヤガラ瀑布を見るときに経験されるもので、その写真を見るのとは区別される。後者の種類の知覚は仲介されたものである。このように、環境の知覚が直接的だと主張するときには、

それが網膜の画像、神経的画像、あるいは心的画像によって仲介されてはいないという意味である (Gibson, 1979, p. 147)。

伝統的知覚理論では、まず感覚作用が起こり、次に感覚入力が処理されて知覚が生じると考えられてきた。この「感覚入力が処理されて知覚が生じる」という旧来の知覚理論にとって代わるものとして、「直接知覚」の理論は主張される。

直接知覚論は、第二次世界大戦中のパイロットの奥行き知覚の検査にはじまり、多年にわたる実験の成果を根拠として提示されたものである。これは、まさに経験科学としての心理学の成果の一つである。そして、これによって認識論における表象主義的見解が否定されているのである。基礎づけ主義の立場からすれば、経験科学の成果が哲学的認識論の否定につながるとは考えにくい。しかし、自然化された認識論では、心理学の成果は認識論に採り入れられることになる。

直接知覚の根拠として、ギブソンは、視覚における網膜像の問題を取りあげている。外界が網膜というスクリーンに投影され、像が映し出されることで、視覚が可能になるという考え方は、17世紀初頭に網膜倒立像を発見したケプラーにまでさかのぼることができる。しかし、「網膜像は見ることでできる何かである」という理論は、網膜像を見る「脳の中の小人」を必要とし、さらに、その小人の網膜像を見る小人を必要とするというように、無限後退に陥る (Gibson, 1966, p. 226 : Gibson, 1979, p. 60)。

「もう一つ別な眼が脳の中にあって、それが脳の中に伝わってきた絵を見る」といった考え方は、すでにデカルトによって批判されていた (Descartes, 1637)。それに代わる理論として考えられたのが、「網膜像は感覚要素として視神経を通して脳に伝達され、それが脳において情報として解釈され、外界の姿をつくりあげる」という情報処理モデルである。しかし、ギブソンは、このような理論によっては問題は解決されないという。網膜像がシグナルとして視神経を伝達されるということは、伝達されたシグナルを翻訳し解釈することを必要とする以上、脳の中の小人という想定から完全に切り離す

ことはできない。しかも、その小人は、明るさと色のさまざまな感覚要素から外界をつくりあげるといふ、ほとんど奇跡に近い課題を成し遂げなければならないことになるのである (Gibson, 1979, pp. 58-61)。

さらに、人間以外の生物の視覚、例えば、昆虫の視覚を観察すれば、そこに網膜像が存在しないことは明らかである。

知覚活動を考えるとき、何かが視神経に沿って伝達されると仮定する必要はない。また、網膜に投影された逆さの像、あるいは一組のメッセージが脳に伝えられると信ずる必要はない (Gibson, 1979, p. 61)。

さらに、知覚者を取りまく光が、要素的な光の点としてではなく一定の構造をもった「包囲光 (ambient light)」として存在していることも、直接知覚の根拠とされる。伝統的知覚理論では、感覚において得られた要素的データを加工し処理することで知覚世界が構成されると考えられてきたが、要素としてではなく一定の構造を有するものとして、知覚において直接とらえられているとすれば、加工処理という心的過程は存在しないことになる。

知覚者が身体を動かしたり移動したりすると、周囲の包囲光配列の構造は、それにともなって変化する。だが、その中でも変わることのない「不変項 (invariant)」が区別される。直接知覚とは、包囲光配列から不変項を抽出する過程である。

直接知覚とは、包囲光配列から情報を得る活動である。これを私は、見回す、歩き回る、見つめるなどの探索活動を含む情報抽出の過程と呼ぶ (Gibson, 1979, p. 147)。

それゆえ、ギブソンは自らの知覚理論を「情報抽出理論 (theory of information pickup)」と呼ぶ。ここで「情報」と呼ばれているのは、「送り手から受け手に伝達されるメッセージ」のようなものではない。ギブソンは、そのような誤解を避けるため「もしできることならば別の語を使いたいところである」と述べている (Gibson, 1979, p. 242)。「情報の伝達は伝達の事実と考えられるものではない」のである。「情報」は知覚者を取りまく外界、すなわち環境の中に含まれているものであり、知覚者はその情報を抽出するこ

とで、対象の性質を特定することができる。外界が情報を伝達することはあ
りえず、情報はただ環境中に存在しているだけである。

こうした直接知覚論は、「外界は知覚者が特定するようなかたちで存在す
る」という「直接実在論 (direct realism)」を正当化する。「わたしたちの感
覚器官は世界についての知識を与えてくれるという単純素朴な確信は、洗練
されたかたちで正当化できる」(Gibson, 1979, p. 379) とギブソンは考える。
知覚経験において、知覚者は環境内の諸対象と直接に、しかも切り離しがた
く結びついている。環境は、知覚される世界であるとともに、知覚者自身か
その中に位置づけられ、その一部を成す世界でもあるからである。

しかし、外界について直接的に知覚でき、知覚されたままの姿で世界が存
在するという「素朴実在論」に対しては、古くからさまざまな批判がなされ
てきた。

第一にあげられるのは「錯覚論法」である。この論法によれば、錯覚のよ
うに知覚的に現れている姿で対象が存在していない場合、直接的に知覚され
ているのは実在ではありえない。知覚されているのは、実在そのものではな
く、現象という水準における対象であり、観念や感覚与件と考えなければな
らない。しかも、通常の知覚も、知覚的体験としては錯覚と区別ができない
以上、あらゆる知覚的体験の直接的対象は、実在する世界ではなく、観念や
感覚与件である。すでに述べたように、このような錯覚論法からは、表象主
義が帰結する。

第二に、ユクスキュルによって明らかにされたように、知覚世界は、知覚
する動物の感覚器官によって異なっており、生物種によって相対化される。
したがって、人間の知覚世界のみが唯一の実在であるとはいえない。知覚世
界の構造が生物種によって異なるとすれば、それらは、いずれも実在する世
界そのものの構造であるとはいえず、各々の生物の知覚世界や環境世界は、
表象的存在と考えざるを得ない。

第三に、科学的実在論の立場からの古典的批判がある。それによれば、
色、音、味などの感覚的性質は、感覚器官の構造によって規定されるもので

あるから、実在そのものの客観的性質ではありえない。むしろ、感覚を越えた悟性によって明らかにされる対象、すなわち科学理論において指示される対象こそが真の実在であるとされる。これは、ドクサに対するエピステーメーの優位を主張するものであり、理論的存在こそ真の実在であり、知覚によって真の実在の有様は捉えられないという批判である。したがって、こうした立場は、存在論的には、本当の実在は原子のみであるといった原子論的な還元主義や素粒子への還元主義へとつながる。

ギブソンの知覚論は、これらの反論に対し、どのように答えることができるだろうか。

「知覚錯誤の問題」について、ギブソンは「それは一つの問題ではなくて種々の問題の複合だ」と述べている (Gibson, 1979, p. 243)。知覚された世界が、現実とは異なるようなケースには、次のようなものがある。まっすぐな棒が水中では曲がって見えるとか蜃気楼が見えるといった、生態光学にとって例外的な状況。静かな水面下にいるサメの危険を察知できなかった場合のような知覚の失敗。ガラス板を素通しの出口と見誤るような錯誤。台形の壁と窓からできた部屋が観察者の視点からは普通の長方形の部屋に見えるような錯覚、等々である。

情報抽出理論からすれば、以上の各ケースは、光学的誤情報の抽出という結果に陥っていると考えられる。まっすぐな棒が曲がって見えたり、台形の部屋が長方形に見えたからといって、曲がった棒や長方形の部屋が実在するわけではない。誤情報の抽出は、情報抽出の活動が達成されておらず、情報抽出に成功していないために生じる。直接実在論は、ある時点で知覚されたとおりの姿で外界が実在すると主張しているのではない。

この点に関して、ギブソンの「視覚野 (visual field)」と「視覚世界 (visual world)」との区別に注目したい (Gibson, 1979, pp. 206-207)。「視覚野はほぼ楕円形の境界をもち、左右方向におよそ180°、上下はおよそ140°に広がっている」。それに対し、視覚世界は「自分の周囲のあらゆる方向に広がる球の面のように果てがない」。視覚野は、一種の「平面画像」に対応す

るものである。しかし、視覚世界は、「探索的な視覚系によってなされる包囲光配列中の不変情報の抽出の結果」であり、何らかの画像に対応するものではない。しかも、「外界における観察者自身の身体の意識」も、視覚世界の経験の一部を成しているのである。「頭、胴、腕や手を含めて、自己を特定する光学的情報は、環境を特定する光学的情報に伴う。この二つの情報は共在している。一方は他方なしには存在し得ない。人が世界を見るときには、同時に自分の鼻を見る。というよりは、むしろ世界と自分の鼻が両方とも同時に特定されているが、世界と鼻について認識は両方の間で推移しうる」(Gibson, 1979, p. 116)。視覚は、視覚野のスナップショットを撮影するような出来事ではない。それは、知覚者自身の身体を含む視覚世界の連続的な探索過程なのである。

知覚は、ある一瞬の外界の姿を写し取る行為ではない。「情報抽出の活動は、連続的な作用、すなわち止むことなく中断することのない活動である」(Gibson, 1979, p. 240)。長方形に見えた部屋は、観察者が歩き回って知覚することで、台形であることが判明する。知覚錯誤は、情報抽出に成功していない段階で生じたり、情報抽出に失敗したときに生じる現象である。「知覚は、個人の達成行為であって、個人の意識の舞台での上演ではない。それは外界と接触を保つことであり、経験の所有ではなくむしろ事物の経験である」(Gibson, 1979, p. 239)。そして、「認識とは、われわれ——能動的で変化する生き物——を多種多様な事象に充ちた変化する世界と接触させつづける過程なのである」(Reed, 1996, p. 13)。それゆえ、錯覚論法によって直接実在論が否定されることはあり得ないのである。

生物種による知覚世界の相対性による批判や科学的実在論による批判への対応を論じるには、知覚される環境に関するギブソンの理論を概観しておくなくてはならない。

5. 生態学的環境の存在論

直接知覚によって知覚されるのは、知覚者の「環境」である。環境は「知覚し、行動する生活体、すなわち動物の周囲の世界」のことである (Gibson, 1979, p. 7)。ギブソンは「環境の知覚について語ろうとする前に、知覚されるものとして何があるのかが、まず明らかにされねばならない」と考える (Gibson, 1979, p. 2)。むしろ、物理的実在としての地球も「世界」と呼ばれるが、動物との相互関係から切り離された世界は、環境ではない。動物と環境との相互関係は、物理学のような自然科学によって説明されるものではない。「物理学で記述される世界を物理的世界というならば、環境は物理的世界と同じではない」 (Gibson, 1979, p. 15)。

物理的世界とは区別される生態学的環境は、「媒質 (medium)」と「物質 (substance)」,そして両者を分かち「面 (surface)」によって記述すべきであるとギブソンは考えている。媒質は、動く物体の移動を可能にする空気や水のような存在である (ただし、水は水生動物にとっては媒質であるが、陸生動物にとっては物質である)。媒質は、光や音、匂いなどを伝え、知覚を可能にする。物質とは、岩、土壌、粘土、木、鉱物、金属、植物や動物の組織などのことで、程度の差はあっても、変形しにくく、固体が入り込むことが難しく、耐久性をもつものである。そして、物質は、媒質と違って、光や匂いを伝えない。すべての物質は面をもつ。そして、面によって物質と媒質とは分離されている。面は、物質が持続するかぎり持続し、物質が気体になると存在しなくなる。面は、変形や崩壊に対してある程度の抵抗をもち、特有の形や肌理をもち、強弱はあっても光に照明されており、多少とも光を反射し吸収する。媒質、物質、面のなかで、面は動物にとって最も重要な意味をもつ。面は、動物の活動のほとんどがそこでおこなわれる場である。面は、物質の内部と違って、見たり触れたりできるところである。

したがって、面を中心とした言説は、環境を記述するための新しい方法を

提供する。それは、環境の記述という目的のためには、空間、時間、形態、運動などによる自然科学的記述よりもすぐれている (Gibson, 1979, p. 22)。「面 (surface)」や「媒質 (medium)」などは、生態学用語であり、「平面 (plane)」や「空間 (space)」のような一般的幾何学の用語とは区別されなければならない。面は実体のあるものであるが、平面は抽象的なものである。面には肌理があるが、平面にはない。面は現実に見えるものであり色をもつが、平面には色はなく、平面は知覚されるものではない。さらに、面は一方の側 (見える側) だけを指すのに対し、平面には両側がある。したがって、面を抽象的幾何学によって扱うことはできない。生態学的環境の記述には、新たな「面の幾何学」が必要になる (Gibson, 1979, pp. 33-36)。

媒質、物質、面に関する事実は、「物理学、機械学、光学、音響学そして科学などと矛盾するものではない」(Gibson, 1979, p. 17)。しかし、こうした科学によっては明らかにすることのできない事実であり、「環境の科学」によって解明される事実である (Gibson, 1979, p. 18)。

面を中心とした記述は、知覚される生態学的環境の記述である。だが、ギブソンは、それだけが世界の唯一の記述であるとは考えていない。「世界は種々な水準で記述することができる」(Gibson, 1979, p. 7) というのが、ギブソンの基本的な立場である。「物理学の実在は原子から銀河系にいたるどの水準でもすべて構造をもっている」(Gibson, 1979, p. 8)。大小両極に広がるそうしたさまざまな水準のうち、「動物や人間の生息環境」である地球上の中間的な大きさの水準に、生態学的環境は位置づけられる。それは、原子の水準でも宇宙の水準でもない。「近代物理学によって重視されている水準は心理学者の要求に添わない」(Gibson, 1979, p. 9)。

有機体との関係において考察された自然は、環境であるが、物理学的物理学 (physical physics) の対象は環境ではない。「環境はそこに生活する動物を包含している。このことは生命がまだ地球上に現れなかった数十億年以前には、実際のところ地表は環境とはいえなかったことを意味している。地球は物理的実在であり、宇宙の一部にすぎなかったし、それは地質学の研究対

象でしかなかった。そして、この惑星上で生物を進化させるための必要な条件を備えた潜在的環境であった。われわれはこのような地球を世界 (world) と呼ぶことができるかもしれないが、それは環境 (environment) ではなかった」(Gibson, 1979, p. 8)。

環境が存在する大きさの水準は、「地球上の普通見慣れた事物の大きさの範囲」、すなわち「生態学的水準」において捉えられねばならない。そしてさらに「地球上の大きさの中間の範囲内で、動物や人間の環境もそれぞれ様々な大きさの水準で構造化されている」(Gibson, 1979, p. 9)。環境は、「入れ子 (nesting)」状の階層構造を成して存在している。「たとえば、峡谷は山に組み込まれ、樹木は峡谷に、木の葉は樹木に、そして細胞は木の葉の入れ子となっている」(Gibson, 1979, p. 9)。ある事物は他の事物の構成部分であり、階層を成している。しかし、環境を分析するための決定的な原子単位といったものは存在しない。「環境を記述するために選ばれる単位は、記述しようとする環境の水準に依存する」(Gibson, 1979, p. 9)。

ギブソンにとって、実在は全体と部分、そしてその下位部分というように、入れ子状に何段階もの複雑な階層を成すものである。その意味で、存在は階層的である。しかも、同じ階層の存在であっても、それに対する記述の水準は一つではない。先述のように、抽象的幾何学による記述と面の幾何学による記述では、記述の方法がまったく異なっている。物理学的物理学 (physical physics) は自然を記述するが、生態学的物理学 (ecological physics) もまた現実の自然の姿の記述である。「物理的な諸科学は、有機体との関係で考察されたときに、生態学すなわち環境についての研究となる」(Gibson, 1966, p. 21)。同じ階層の存在であっても多様な記述が可能なのである。その意味で、存在は多元的である。

ギブソンにとって、存在は階層的であり多元的である。このような考え方は、あらゆる存在を一つの水準で一元的に説明しようとする還元主義の対局に位置するものである。存在は物理学的に記述することも生態学的に考察することもできる。しかも、生態学的環境の記述は生物種によって異なる。知

覚世界の相対性や科学的实在論といった視点から「直接实在論」が批判される時、問題にされるのはまさにこの点であった。物理的世界もさまざまな生物種の環境世界もすべて同一の实在と見なされるような存在論が確立されれば、そうした批判は回避できることになる。直接实在論を支え得るのは、階層的多元的存在論なのである。

一つの同じ实在が、同時に多様な知覚世界でもありうるということは、次のような比喻を用いて説明することができる。「一つのチーズは、三角形、四角形、あるいは円形の断片ができるように切り分けることができるが、それらがすべて一度にできるようにするのは不可能である」。「連続体 (continuum)」である空間は、互いに両立不可能な仕方では分割し、区切ることができる。B. スミスは「互いに競合し合う一群の『知覚空間』の各々は、もしそれらが一つと同じ实在の異なった区切りを表しているのだと解されるのなら、結局はすべて両立可能であるということが判明するであろう」と述べている (Smith, 2001, p. 29)。

だが、これはあくまでも一つの比喩的な説明であるにすぎない。ギブソン自身は、異質な環境を両立可能にする存在論的な説明をおこなってはいないし、複雑な階層を成して序列化される世界について存在論的な議論を展開しているわけでもない。直接实在論を正当化するには、实在一般の階層的多元的構造に関する包括的理論を展開する必要がある。

全体と部分の関係に関する存在論的研究は、「メレオロジー (mereology)」と呼ばれる。メレオロジーは、ポーランドの論理学者レシニェフスキによって構築された論理学の一部門であり、「meros (『部分』の意のギリシア語) についての理論」を意味している。「部分学」とも訳されるが、部分と全体およびその関連概念に関する形式的理論である (Simons, 1987, pp. 5-6)。レシニェフスキは、トワルドウスキによって形成されたポーランド学派に属しているが、全体と部分の關係に着目した理論に関しては、トワルドウスキが所属していた独逸学派 (ブレンターノ学派) の哲学者たちにまでさかのぼることができる。なかでも「全体と部分に関する理論について」

と題された『論理学研究』第三研究においてフッサールが試みた形式的存在論は、存在論におけるメレオロジーの端緒と見なすことができる。スミスは、こうした理論を積み上げていくことで、生態学的環境の存在論的構造に関する理論が可能になると考えている。「有機体ないし認知主体がそれぞれに固有の見方で実在にアプローチすることで、一つの同じ実在が、互いに交差する異なった断片に区切られるが、そこに何の関係しているのかを一つの理論的枠組みの中で理解するには、(フッサールが『論理学研究』第三研究においてすでに略述したような) 一般的メレオロジーの知識の蓄積が必要である」(Smith, 2001, p. 29).

生態学的知覚論の前提となる直接実在論は、メレオロジーによってその存在論的な基盤の脆弱さを補強しなければならない。それによって、多様な知覚システム、認知システムの各々に適合した生態学的環境が、同時に一つの同じ実在において可能となることが理論的に説明されることになる。この理論は、「環境についての実在論的科学」となると考えられるが、それはまた、認識論としての生態学的心理学に対応する究極の存在論ということにもなるであろう。

[参考文献]

- Carnap, R. (1928) *Der logische Aufbau der Welt*, Berlin, 1928.
- Descartes, R. (1637) *La Dioptrique*. 青木靖三・水野和久共訳「屈折光学」, 『デカルト著作集』第1巻(白水社, 1973年).
- Descartes, R. (1641) *Meditationes de Prima Philosophia*. 所雄章訳『省察』, 『デカルト著作集』第2巻(白水社, 1973年).
- Gibson, J. J. (1966) *The Senses Considered as Perceptual Systems*, Waveland.
- Gibson, J. J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Lawrence Erlbaum. 古崎敬他訳『生態学的視覚論』(サイエンス社, 1985年).
- Gibson, J. J. (1982) *Reasons for Realism*, Lawrence Erlbaum.
- Husserl, E. (1900) *Logische Untersuchungen* Bd. I, 1. Auflage, 立松弘孝訳『論理学研究』1 (みすず書房, 1968年).

- Husserl, E. (1901) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 1. Auflage, 立松弘孝他訳『論理学研究』2～4 (みすず書房, 1970～1976年)。
- Husserl, E. (1913) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch. In *Husserliana* Bd. III. 渡辺二郎訳『イデー I』(みすず書房, 1979～1984年)。
- Husserl, E. (1936) *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. In *Husserliana* Bd. VI. 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(中央公論社, 1974年)。
- Husserl, E. (1952) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Drittes Buch. In *Husserliana* Bd. V.
- Merleau-Ponty, M. (1945) *La Phénoménologie de la Perception*, Gallimard. 竹内芳郎他訳『知覚の現象学』(みすず書房, 1967～1974年)。
- Quine, W. V. O. (1951) “Two Dogmas of Empiricism”, In *From a logical point of view*, Harvard UP. 飯田隆訳「経験主義のふたつのドグマ」, 『論理的観点から』(勁草書房, 1992年)。
- Quine, W. V. O. (1969) “Epistemology Naturalized”, In *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia UP. 伊藤春樹訳「自然化された認識論」, 『現代思想』第16巻第8号 (青土社, 1988年)。
- Reed, E. S. (1996) *Encountering the World : Toward an Ecological Psychology*, Oxford UP. 細田直哉訳『アフォーダンスの心理学』(新曜社, 2000年)。
- Reed, E. S. (1997) *From Soul to Mind*, Yale UP. 村田純一他訳『魂から心へ』(青土社, 2000年)。
- Simons, P. (1987) *Parts : A Study in Ontology*, Oxford UP.
- Smith, B. (2000) “Truth and the Visual Field”, In Petitot, J., Varela, F., Pachoud, J. B., Roy, J.-M. (eds.), *Naturalizing Phenomenology : Issues in Contemporary Phenomenology and Cognitive Science*, Stanford UP.
- Smith, B. (2001) “Husserlian Ecology”, 宇多浩訳「フッサール主義的生態学」, 京都大学大学院人間・環境学研究科『人間存在論』第7号。
- Uexkül, J. von, and Krizat, G. (1934) *Strefzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*, Fischer Verlag GmbH. 日高敏隆・野田保之訳『生物から見た世界』(思索社, 1973年)。